

頭陀支と禪定

阿部 慈園

- 1 はじめに
- 2 頭陀および頭陀支の語義
- 3 禪定をあらわす言葉
- 4 13頭陀支
- 5 頭陀支と禪定
- 6 おわりに

1 はじめに

釈尊および釈尊をとりまく最初期仏教時代の修行僧たちは、衣食住に関してひどく厳しい生活を営んでいた。粗衣・粗食に満足し、いかなる住居にも固執しない遊行不定住生活を送っていた。特に住に関して、中村元博士は、「最初期の仏教修行者は、住居とか臥床というものをもっていなかった¹⁾」といわれる。いわば、外見上はルンペンとほとんどかわらない生活を送っていたといえるであろう。

その、最初期仏教の修行僧たちの衣食住をおおむね規定していた生活法が、「頭陀」(dhuta, dhūta) と呼ばれるものである。代表的なものとして、①衣に関する、ボロ布を綴って作った糞掃衣の着用(着糞掃衣)、②食に関する、もっぱら托鉢食のみの受用(常乞食)、③住に関する、人里離れたところでの居住(阿蘭若住)が挙げられる。

これが、原始仏教聖典で説かれる頭陀の支分の基本型である。パーリ系では、これに5支が付加されて8支(*Niddesa*, 義積)となり、最終的には13の支分が南方上座部の正説となったと見なされる²⁾。

一方、大乘系では、頭陀の支分として一般に12支がたてられる。例えば、法蔵部所伝の『四分律』の頭陀説を継承した『般若経』は12支を採用している。ただ

し、小品系と大品系において支分の列挙順序および名目に少しく出入りがあるが、ともに12支をたてている³⁾。

さて、釈尊の、サールナートにおける初転法輪ののち、仏教教団は次第に社会的信用および勢威を増し、拡大して行った。マガダの国王ビンビサーラは竹林精舎を、コーサラの長者スダッタは祇園精舎を、釈尊の仏教教団に寄進した。これら二つの精舎は、その後の仏教教団の二大拠点ともなった。

そして、ほとんどの仏教僧たちは、今までの遊行不定住の生活から、精舎への定住生活へ移行するようになった。（もちろん、乾季には、説法教化のために諸方へ趣き遊行をなした）

精舎での集団生活を営むようになると、集団規則としての戒条（*sikkhāpada*, *sikṣāpada*, 学処）が、おいおいそして細かく制定されるようになった。例えば、パーリ律では、比丘戒として227ヶ条が制定された。精舎では、当然戒条を遵守することが義務づけられ、その結果、従来の頭陀の実践は副次的ないしはかえりみられないようになった。

しかし、マハーカッサパ（摩訶迦葉）あるいはデーヴァダッタ（提婆達多）などの、古風な修行形態を墨守する、より保守的な修行僧（頭陀行者と呼ばれる）の一群も残存していた。かれらは、頑として精舎に住まず、山林や岩窟などに住み、托鉢食のみで招待食を拒否し、糞掃衣のみを着用して、仏教信者から布施される衣を謝絶した。

しかしながら、そのような頭陀を専一にする比丘たちも、釈尊に会って説法を聞くこともあったであろうし、朋友比丘への用事などで、精舎に出入りすることがあった。そのようなとき、頭陀行者と精舎に住する比丘との間で、行履に関していくばくかの衝突あるいは混乱がときとして生じた。

例えば、一坐食支（一坐のみの食事をする頭陀の支分）を受持する頭陀比丘が精舎の食堂で食事をしているとき、長老比丘が食堂にあらわれたとする。そのときは、立ち上って長老比丘に敬意を表するのが、精舎内での規則である。立ち上ってしまうと、その頭陀比丘は、食べかけの食事を放棄することになる。もはや、その日の食事はできないことになる。

このように、ときとして戒条と頭陀の支分とが抵触することがある。その場合は、戒条の方を優先するのが通例とされた。

ちなみに、『ヴィスuddhimagga』 (*Visuddhimagga*, 清浄道論) (以下 *Vis*)

では、戒 (sīla, śīla) も頭陀も、それを受持するという強い意思力 (思, cetanā) を本質とするという点で共通し、また、戒を浄化するために頭陀支が実践されるべきであると説かれている⁴⁾。

さて、仏教僧にとって、仏道修行の根本は禪定である。禪定 (瞑想) は、すでにインダス文明にその根跡が見られるように、インドの修行者は等しく禪定を修した。いかなる修行者も、心を静め、精神統一をはかる禪定を基盤として、おのが思想・哲学説を展開した。

釈尊当時、解脱 (mokṣa) を得るための修行方法として、苦行 (tapas) と禪定 (dhyāna) の二つがあったといわれる。釈尊は、菩提樹下での成道前に、アーラーラ仙に就いて無所有処 (ākīñcañña-āyatana)、ウツダカ仙に就いて非想非非想処 (nevasaññā-nāsaññā-āyatana) という禪定を修したとされる。この二つの禪定は、のちに四無色定に採り入れられることになる。

さて、本稿は、最初期仏教の修行僧たちの日常をおおむね規定し、その後の一群の仏教僧たちが継承した頭陀支 (dhutaṅga) と禪定との関わりについて、若干の考察をなすことをその目的とする。

2 頭陀および頭陀支の語義

考察に先立ち、「頭陀」および「頭陀支」の語の意味を明きらかにしておこう。

頭陀 (dhuta, dhūta) とは、「洗い流す」「除き去る」を意味する動詞語根 √dhū から派生した語である。音写語「頭陀」は旧訳で、玄奘などの新訳は「杜多」である。意識語としては、「斗藪」などが見られる。鶏や犬などが起き上って身ぶるいをすることを意味する。現代インド語の一つマラーティー語でも、汚れた衣類などを「洗濯する」という意味で「ドゥーネー」(dhūṇe) の語が用いられている。

従って、「頭陀」とは「身体に付着したほこりや垢などを除き去ること、洗い流すこと」を原義とすると見てよい。Vis には、「煩惱を除遣することより、頭陀である」(kilesa-dhunanato dhutaṃ)⁵⁾ と説かれるように、「頭陀」という語は、「心に付着した煩惱という垢を洗い流すこと」つまり「心の洗濯」の意味をもつと見なされる。

さらに、Vis の余処⁶⁾ には、頭陀 (dhuta) を人 (puggala) と法 (dhamma) とから解釈して、次の二義が呈示される。

① 煩惱を除遣してしまった人 (dhutakilesa puggalo)

② 煩惱を除遣するための修行徳目 (kilesadhunano dhammo)

である。前者は、具体的には、阿羅漢 (arahant) ないし漏尽者 (khiṇāsava) のことであるという⁷⁾。後者は、頭陀支 (dhutaṅga) を指すと見てよい。

さて、dhutaṅga (頭陀支) という語は、パーリ聖典の古層部分にはあらわれない⁸⁾。パーリ聖典でもやや遅れて成立したと見なされる『マハーニッデーサ』 (*Mahāniddeśa*, 大義釈, 以下 *MNd*) に初めてあらわれる⁹⁾。ここでは、特に aṭṭha dhutaṅgāni (8 頭陀支) と明示されている。故に、dhutaṅga というタームの出現は、*MNd* よりと見られよう。さらに、この語は他部派の文献、または大乘仏典 (dhutaṅga の語を採用¹⁰⁾) には見られないことから、南方上座部独自のテクニカルタームではないかと考えられるが、ここではその指摘に止め、詳細は後日に期したい。

dhutaṅga という語は、明きらかに、dhuta と aṅga からなる合成語である。*Vis* は、aṅga に kāraṇa (原因, 必須条件) の意味を与えている¹¹⁾。*Vis* の編著者ブッダゴーサは、パーリ聖典中の語の意味を規定するにあたって、ときとして『パーニニ・スートラ』をふまえていることがある¹²⁾ が、そこには aṅga = kāraṇa の規定は見られない。aṅga = kāraṇa の語義規定の由来 (あるいはブッダゴーサ独自の解釈か) は目下不明であるので、その考察も後日に譲ることにしたい。

ともあれ、ブッダゴーサは、aṅga (支分) を kāraṇa (原因) と規定したうえで、dhutaṅga を、次の三種に解釈している¹³⁾。

① さて、これら一切 [の頭陀支] は、それぞれの受持によって煩惱を除遣することより、除遣した者 [と呼ばれる] 比丘の原因である。(sabbān' eva pan' etāni tena tena samādānena dhutakilesattā dhutassa bhikkhuno aṅgāni)

② あるいは、煩惱を除遣することより、除遣という名称を得た智が、これら [頭陀支] の原因であるから、頭陀支といわれる。(kilesadhunanato vā dhutan ti laddhavohāraṃ ñāṇaṃ aṅgaṃ etesaṃ ti dhutaṅgāni)

③ あるいはまた、それら [頭陀支] は、対治 [されるべき煩惱] を除遣するから頭陀であり、かつ仏道修行の原因であるから、頭陀支といわれる。(atha vā, dhutāni ca tāni paṭipakkhaniddhunanato aṅgāni ca paṭipattiyā ti pi

dhutaṅgāni)

以上を要約すれば、dhutaṅga（頭陀支）とは、①頭陀比丘の要因（必須条件）であり、②煩惱除遣という智を因としてもつものであり、③仏道修行の要因となるものである、といえよう。

従って、如上の考察より、「頭陀」には、①煩惱を除遣せる人、②煩惱除遣のためのための修行徳目の二義があり、「頭陀支」とは、①頭陀行者を頭陀行者たらしめる必須条件であり、②煩惱除遣という智を内因しているものであり、さらに③仏道修行を完成させるための要因であると、ひとまず定義づけられるであろう。

3 禪定をあらわす言葉

原始仏教聖典には、禪定をあらわす言葉が数多く挙げられている¹⁴⁾が、ここではそれらを次の四グループに分け、それぞれを略説することにした。

(A) インド思想一般と共通の言葉

(1) jhāna (dhyāna, 禪) 禅那・禅思・静慮などと漢訳されるが、そのうち静慮は「静かに^{おもんばか}慮ること」という意味で最もよく原意を伝えている。この語を冠した代表的な禪定説として「四禅」が挙げられる。仏教以前のバラモン教において、『チャンドーギヤ』『カウシータキ』『シュヴーターシュヴァタラ』などのウパニシャッド文献にこの語があらわれる。

(2) samādhi (定) 「心を平等に保って一つの対象に心を專注すること」という意味で等持と漢訳される。三昧はその音写語。この語を冠する仏教用語としては、八正道中の「正定」とか、「定根」「定力」が挙げられる。インド思想一般では、『マイトリ・ウパニシャッド』『バガヴァッド・ギーター』、さらにジャイナ教文献にもあらわれる。

(3) yoga (瑜伽) 「結合・関係・軛・束縛・修行・専心・瞑想」などの意味で用いられる。この語は、仏教によって初めて禪定を意味する術語になった。この語を冠した yogakkhema (瑜伽安隱) は「心統一から得られた安らぎ」と解され「涅槃」の同義語と見なされた。インド思想一般では、『リグ・ヴェーダ』『タイッターリヤ・ウパニシャッド』に見え、『ヨーガ・スートラ』では、「心の作用の止滅」と定義される。

(B) 原始仏教独自の言葉

(4) samāpatti (等至) 「到達」を原義とする。「禪定の境地に到達すること、

さらに到達した状態や境地」を意味する。この語を冠した禅定用語に「四無色定」「滅尽定」がある。これらに「四禅」が加えられて「九次第定」という禅定説にまとめあげられる。なお、『ヨーガ・スートラ』には、この語は *samādhi* とほぼ同義に用いられている。

- (5) *samatha* (*śamatha*, 止) 「しずまること」を原義とする。「心が平静となった状態」を指す。禅定の境地が、心の止息・寂靜を指すところから「止」と漢訳された。音写語は「奢摩他」。原始仏教時代には「止」は、後述する「観」とは別々に用いられていた。
- (6) *vipassanā* (*vipaśyanā*, 観) 「真実の姿を観ること」を意味する。音写語は「毘鉢舍那」。止に比べて観は、むしろ智慧をその本質とする。
- (C) 本来禅定の意味を持たない言葉で禅定をあらわす場合
- (7) *citta* (心) 本来は単に「こころ」を意味するが、『サンユッタ・ニカーヤ』『ディーガ・ニカーヤ』などでは *samādhi* の意味で用いる。戒定慧の三学中の「定」には *adhicitta* (増上心) の語が当てられる。「心一境性」「心解脱」の心も禅定の意味に解される。この語を冠する禅定説に「四無量心」がある。
- (8) *bhāvanā* (修習) 本来は「身に修めること、身につくまで修行すること」を意味するが、*yoga* と同義語に見なされることもある。『ダンマパダ』に「その人の心は昼も夜も修習によって楽しい」と説かれる。のちのパーリ仏教では、「三慧」中の「修所成の慧」や「三福業事」中の「修所成の福業事」の修も修習のことで、禅定をあらわす。具体的には禅定の修習を意味することが多いので、転用と見られている。
- (9) *vimokkha* (*vimokṣa*, 解脱) 本来は「脱れること、煩惱や束縛から離れて精神が自由になること」を意味するが、禅定を実修することによって解脱を得ることができるから、禅定をあらわす言葉と見なされた。この語を冠した禅定用語に「八解脱」がある。
- (10) *sati* (*smṛti*, 念) 本来は「おもい出すこと、記憶すること、対象を記憶して忘れない心のはたらき」を原義とする。『ダンマパダ』に「念仏」、『華嚴経』に「念仏三昧」の語が見えるように、念とは「仏を憶念して心の統一・安定が実現された状態」を指すことより、禅定と関わりの深い言葉である。念は「四禅」とも関係する。この念を整理し体系化した禅定説に「四

念処」がある。そのうちの「身念処」の一部をなす「出入息念」(安般念)は、禪定のさいの呼吸法である。

- (11) *saññā* (*saṃjñā*, 想)「感受したものを表象すること, 色彩や長さや生滅・苦楽などについて心の中に思いうかべる作用」を原義とするが、ときには禪定と同義で用いられる。『アングッタラ・ニカーヤ』『ディーガ・ニカーヤ』などで「五想・七想・九想・十想」などにまとめて説かれるが、それらは「不浄想」などを含む禪定観法である。
- (D) 本来禪定の実践を示す言葉で禪定をあらわす場合
- (12) 結跏趺坐 (*pallaṅkena nisinna*, ~*nisīdati*, ~*ābhujati*; *paryāṅkena* ~)「足を組んで坐ること」を意味し、本来は坐禅を実修するときの坐り方、坐相あるいは坐法を意味するが、転じて禪定をあらわす言葉として用いられることもある。この語は両足を組む坐法であるが、片足だけを腿の上に置く「半跏趺坐」もある。
- (13) 独坐 (*paṭisallāna*; *pratisaṃlayana*) 本来は「ひとり瞑想を行なうこと」を原義とし、心的状態とか修習の方法を示す言葉ではないが、「独想・静観・瞑想」などと訳されることもあり、禪定をあらわす言葉の一つと見なされる。ちなみに、『碧巖録』の「独坐大雄峰」の五言は有名。
- (14) 昼住 (*divā-vihāra*) 原義は「食後の休息」であろうが、『サンユッタ・ニカーヤ』に「托鉢して食事が終わったのち、林に入って、昼住のために樹下にて坐る」とあるように、昼食後マンゴーなどの樹の下で静かに瞑想に入ることを「昼住」といったと見られる。故に、この語も「結跏趺坐」や「独坐」と同様に見なすことができる。

さらに、細かくいうならば、このほかにも禪定に関連した言葉を挙げることができようが、禪定をあらわす言葉としては以上で充分であろう。ちなみに、次の二語を挙げておきたい。

- (15) 経行 (*caṅkama*, *caṅkamana*; *caṅkrama*, *caṅkramaṇa*)「そぞろ歩き、またその場所」を原義とする。長時間の禪定の結果生ずるしびれや激痛、また睡魔をいやすための足ならしといえよう。この語は『テラガター』などに見える。禪定の実践を示す言葉と見なされるから、(D)のグループに入るであろう。経行の法は、中国・日本にも伝えられた。特に江戸時代の面山は『経行軌』を著わし、細かく経行の仕方を規定した。

- (16) 業処 (kammaṭṭhāna; karmasthāna) 「瞑想の対象」を原義とする。この語は「アッタカター・ステージ」の言葉であり、^{パーリ}原始聖典中には見られない。Vis は、禪定修習のさいの観法の対象を四十種にまとめあげたが、それらの多くはすでに原始聖典に説かれているものである。四十とは、「十遍処」「十不浄想」「十随念」「四梵住（四無量心）」「四無色」「食厭想」「異差別」をいう。禪定者の性格や禪定の進度によって、それぞれの「業処」が選択される。従って、この言葉も禪定と深い関わりがある語であることは言をまたない。

4 13頭陀支

原始仏教聖典（パーリ文献）中、13頭陀支が説かれているのは、(1)『テーラガーター』(*Theragāthā*) と(2)『チュッラニッデーサ』(*Cullaniddesa*) と(3)『ヴィナヤ・パリヴァーラ』(*Vinaya Parivāra*) である。そのうち(1)は最近の研究によれば後代の付加の可能性が強く、かつ正しい衣食住の列挙順序になっていない。(2)は、タイ版の伝える13支と見るよりも、ビルマ・セイロン版の伝える8支を採る方が妥当である。(3)は、頭陀支の古型を保持しつつまとめあげられた説で、その列挙順序には衣食住の配慮が全くなされていない¹⁵⁾。

それゆえ、パーリ系の13支が明確に衣食住の配列意図をもって体系化されたのは、原始仏教の末か、部派仏教のはじめころと推定される。Vis では、13支を衣・食・住・精進 (civara, piṇḍapāta, senāsana, viriya) の四グループに分ける試みがなされているの¹⁶⁾で、ここでもそれに従って、各支を略説することにしよう。

(A) 衣と相応する支分

- (1) 糞掃衣支 (paṃsukūlikaṅga) 糞掃衣（汚物またちりあくたの如く不用なもの無価値なものとして、処々に捨てられた布片を重ね綴りあわせて作られた衣）の着用をもっぱらとし、仏教信者から布施された衣（居士施衣 gahapatidānacivara）を拒絶する支分のこと。糞掃衣の種類にはパ漢所伝の各種があるが、Vis の23種が最も増広されたものであり、その半数近くが「得られた場所」にちなんでその名称がある¹⁷⁾。
- (2) 三衣支 (tecivarikaṅga) 三衣とは①大衣 (saṃghāṭī), ②上衣 (uttarāsaṅga), ③中着衣 (antar-vāsaka, antara-) のことであり、これら三衣

(84)

頭陀支と禪定（阿部）

のみを着用し、第四番目の衣を受持しないとする支分。ただし、略衣としての肩袈裟 (amṣakāsāva) だけは、第四衣として着用してもよい。

(B) 食と相当する支分¹⁸⁾

- (3) 常乞食支 (piṇḍapātikaṅga) 僧伽食・招待食などの14種の食物を摂ることを拒否し、もっぱら托鉢乞食のみによって食物を得る支分。
- (4) 次第乞食支 (sapadānacārikaṅga) 行乞のときには、至った村（あるいは家）を素通りせず、村の家々を順次に行乞する支分。ただし、その村や道路に危険があると判断した場合は、別の村を行乞してもよい。
- (5) 一坐食支 (ekāsanikaṅga) 精舎の食堂や信者の家などで、一坐のみの食事をもっぱらとし、多坐食を拒否する支分。食事中あるいは食後、坐を立ったならば、食事のために二度と坐してはならない。
- (6) 一鉢食支 (pattapiṇḍikaṅga) 鉢中にあらかじめ用意された食物だけを摂り、第二杯目つまりおかわりを拒否する支分。
- (7) 時後不食支 (khalupacchābhattikaṅga) 正式の食事ののちで、ふたたび食事をしない支分。

(C) 住と相応する支分

- (8) 阿蘭若住支 (āraññaṅga) 人里離れたところ (arañña) を住所とし、村の近く (gāmanta) の住所を拒否する支分。ただし、托鉢のために村から近からず遠からずのところが選ばれるべきである。
- (9) 樹下住支 (rukkhamūlikaṅga) 屋根の下に住することを拒否して、樹の下を住所とする支分。ただし、こうもりの住む樹や空洞のある樹、また精舎の中央に立つ樹などを避け、精舎のかたすみ立つ樹を選ぶべきである。
- (10) 露地住支 (abbhokāsikaṅga) 屋根の下と樹木の下をも避けて、常に屋外を住所とする支分。ただし、聴法や布薩のとき、また雨が降ってきたときは一時建物の中に入ってもよい。
- (11) 塚間住支 (sosānikaṅga) 塚墓つまり墓所の中やその近くを住所とする支分。
- (12) 随処住支 (随得敷具支 yathāsanthatikaṅga) 住所への貪欲を離れるために、与えられた臥坐具あるいはいかなる住所といえどもいとわず、これを享受する支分。

(D) 精進と相当する支分

- (13) 常坐不臥支 (nesajjikaṅga) 常に跏趺して、横臥することを拒否する支分。

5 頭陀支と禪定

次に、上述の13頭陀支と禪定との関わりについて考察することにしよう。

13支のうち、衣の2支と食の5支とは禪定に入るための準備的なものと考えられよう。住の5支は、頭陀行者の住所を規定したものではあるが、それぞれの住所で何をするかという、禪定すなわち瞑想をなしつつ、諸法の真実のすがたを観察すると見てよい。従って、住支のそれぞれは禪定つまり「止観」と深く関わっていると見られる。精進支の「常坐不臥支」は、禪定そのものといえよう。

以下、住支・精進支と禪定との関わりについて、*Vis* の説くところを紹介することにしよう。

阿蘭若住支 この支分を受持する頭陀比丘は、その功德 (ānisaṃsa) として、いまだ得られていない禪定 (samādhi) を獲得し、すでに得られた禪定を守護することができる。

Āraññiko bhikkhu arañña-saññaṃ manasikaronto bhabbo aladdhaṃ vā samādhim paṭiladdhaṃ, laddhaṃ vā rakkhituṃ (阿蘭若住を習慣とする比丘は、阿蘭若という想いを作意しつつ、いまだ得ざる定を獲得することができ、あるいはすでに得られた〔定を〕守護することが〔できる〕。 *Vis* II -54)

同じく、功德として、阿蘭若は辺鄙なところであるから、修行の妨げとなるような色 (rūpa) などの認識対象 (六境) がないので、頭陀行者は心の散乱から回避できる。

Pantasenāsanavāsino c'assa asappāyarūpādayo cittaṃ na vikkhipanti (辺鄙なところを臥坐所とするかれ (阿蘭若住者) にとって、ふさわしくない色 (眼の対象) などが、[かれの] 心を散乱させない。同)

樹下住支 樹下にあつて、緑の若葉が黄に紅に、やがて散るのを観ることによって、その功德として、常想 (niccasañña) を除き去り、無常想 (aniccasañña) を起こさせる。すなわち、無常観を得ることができる。

Abhiṇhaṃ tarupaṇṇavikāradassanena aniccasañña-samuṭṭhāpanatā (しばしば若葉が変化するのを見て、無常想を起こさせる。 II -58)

Abhirattāni nīlāni paṇḍūni patitāni ca, passanto tarupaññāni nicca-saññaṃ panūdati（緑の若葉が深紅となり、黄色になって、〔地に〕落ちるのを観察する者は、恒常の想いを除き去る。Ⅱ-59）

ゆえに、具眼者は、禪定（修習 bhāvanā）を楽しむことができる樹下住支を軽んじてはならない。

Tasmā hi Buddhadāyajjaṃ bhāvanābhiratālayaṃ, vivittaṃ nātimaññeyya rukkhamaḷaṃ vicakkaṇo（それゆえに、仏が遺された、修習を楽しむ者の住所である、遠離れた樹下を具眼者は軽んずべからず。同）

露地住支 露地住支を受持する頭陀比丘も、その功德として、無執着にして、禪定（修習）を楽しむことができる。

Abbhokāse vasaṃ bhikkhu migabhūtena cetasā, thīnamiddhaṃ vinodetvā bhāvanārāmatam sito（露地に住している比丘は、鹿のごとき〔無執着の〕心で、惛沈睡眠を除き去って、修習を楽しみつつ坐する。Ⅱ-63）

塚間住支 この支分を受持する頭陀比丘の功德として、死念（maraṇa-sati）を獲得することができ、また不浄相（asubha-nimitta）すなわち不浄観（asubha-bhāvanā）、不浄想（-sañña）に得達することができる（Ⅱ-67）。

Sosānikaṃ hi maraṇānusatippabhāvā niddāgatam pi na phusati pamādadosaṃ, sampassato ca kuṇapāni bahūni tassa kāmānurāga-vosagam pi na hoti cittaṃ（まさに、塚間住者は死随念を生じ、眠ったとしても、放逸の過に抵触しない。多くの死体を観察しつつあるかれにとって、心は、欲や貪りに征服されることはない。Ⅱ-68）

塚間住者は、塚墓の近くに、経行処（caṅkama）や庵（maṇḍapa）を設けて住することになるが、経行するときは、半眼（addhakkhika）で墓（āḷāhana）を見ながら経行すべきである（Ⅱ-65）とされる¹⁹⁾。

常坐不臥支 この支分は、禪定の実修そのものといえよう²⁰⁾。結跏趺坐し、正身端坐して、常坐不臥支を受持する頭陀比丘は、悪魔の心すら動揺させるという。

Ābhujitvāna pallaṅkaṃ, paṇidhāya ujum tanum, nisīdanto vikampeti Mārassa hadayaṃ yati（結跏趺坐して、上体を真直ぐに安置させて坐しつつある修行者は、悪魔の心〔すらも〕動揺させる。Ⅱ-76）

この支分を受持する功德の一つに、あらゆる業処（kammaṭṭāna）の実修についてのふさわしさが挙げられている（Ⅱ-75）。また、普通の比丘が、横臥して睡

眠をとる中夜（夜の10時から翌日の2時までの4時間）は、常坐不臥者は足ならしのために経行してもよいという規定も *Vis* に見られる（II-73）。

最後に、*Vis* は、頭陀支の実践の用不用を禪定の深まり・減退などに関連づけて、次のように説いている（II-88）。

- ① 頭陀支を実践する者に、業処（禪定）の深まり〔が期待できる場合は、頭陀支を〕かれは実践すべきである（*yassa hi dhutaṅgaṃ sevatassa kammaṭṭhānaṃ vaḍḍhati, tena sevitaḅbāni*）
- ② 〔頭陀支を〕実践しても、〔業処がむしろ〕減退する〔場合は〕、かれは実践すべきではない（*yassa sevato hāyati, tena na sevitaḅbāni*）
- ③ しかし、〔頭陀支を〕実践しても、実践しなくとも、〔業処が〕深まり、減退しない〔場合は〕、後学への憐れみゆえに、かれは〔頭陀支を〕実践すべきである（*yassa pana sevato pi asevato pi vaḍḍhat' eva na hāyati, tenāpi pacchimaṃ janataṃ anukampantena sevitaḅbāni*）
- ④ さらに、〔頭陀支を〕実践しても、実践しなくとも、〔業処が〕深まらない〔場合でも〕未来の習気（習慣力）のために、かれは〔頭陀支を〕実践すべきである（*yassa pi sevato pi asevato pi na vaḍḍhati, tenāpi sevitaḅbāni yeva, āyatim vāsanatthāya*）

6 おわりに

上来述べてきたことより、ひとまず次のことが指摘されるであろう。

- ① パーリ13頭陀支のうち、衣支と食支とは禪定に入るための準備的なものであり、住支と精進支とが特に禪定と関わりをもつこと。
- ② そのうち、阿蘭若住支は、既得の禪定（*samādhi*）を守護し未得の禪定を獲得できる。樹下住支は、無常想（*aniccasaññā*）を起こさせる。露地住支は、修習（*bhāvānā*）の楽を得る（樹下住支も同）。塚間住支は、死随念（*maraṇānusati*）および不浄想（*asubhasaññā*）を得る。常坐不臥支は、あらゆる業処（*kammaṭṭhāna*）の実修にふさわしいこと。
- ③ さらに、頭陀支の実践の用不用に関しては、業処（禪定）が深まる場合は頭陀支を実践すべきであるが、むしろ減退する場合は実践しなくともよい。しかし、後学への憐れみのため、また自らの未来の習気のためにはやはり頭陀支を実践すべきであること。

註

- 1) 中村元『原始仏教の成立』, 春秋社, p. 324.
- 2) 阿部「Cullaniddesa の頭陀支再考」(『仏教学』第13号)。
- 3) 阿部「小品系般若経の頭陀支」(『印仏研』35-1) ; 同「般若経の頭陀支」(『高崎直道博士還暦記念・インド学仏教学論集』, 春秋社, 1987)。
- 4) *Visuddhimagga*, HOS本, I -17, II -1, II -17.
- 5) *Vis* II -11.
- 6) *Vis* II -18.
- 7) *Paramatthamañjūsā (Pm)*, REWATADHAMMA 本, II -73/76: cf. J. ABE: *Saṅkhepatthajotani Sīla-dhutaṅga*, Poona, intro. pp. xxiv-xxv.
- 8) *Vinaya Parivāra* にこの語があらわれる (*Vin* v 193) が, 後代の付加か? *PTSD* p. 342 参照。ただし, dhuta は, *Thag* 1120 に, dhuta-guṇa は *Vin* iii 15, *Thag* 1087 などに見える。ブッダゴーサやダンマパーラは, dhutaṅga と dhutaguṇa を同義と見なしているようである (*Vis* II -79; *Pm* II -72, 73/76)。
- 9) *MNd* 66, 188, 476.
- 10) 例えば, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, VAIDYA 本, p. 192.
- 11) *Vis* II -4: aṅgan ti kāraṇaṃ vuccati.
- 12) 阿部「Buddhaghosa と Pāṇini」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第16号)。
- 13) *Vis* II -11.
- 14) 藤田宏達「原始仏教における禪定思想」(『佐藤博士古稀記念仏教思想論叢』, 山喜房仏書林, 所収) ; 中村元「原始仏教における止観」(関口真大編『止観の研究』, 岩波書店, 所収) ; 田上太秀『禅の思想』, 東京書籍 参照。
- 15) 阿部「Cullaniddesa の頭陀支再考」参照。
- 16) *Vis* II -88.
- 17) 阿部「糞掃衣考」(『東方』第1号)。
- 18) 阿部「パーリ頭陀支に見る食の仏教学」(『東方』第2号)。ちなみに, これら食支は, 3), 4) の「乞食支」グループと5) 6) 7) の「節量食支」グループとに分けることも可能であろう。
- 19) 「随处住支」については, *Vis* に特に禪定用語が見あたらないので, ここでは省略する。
- 20) この「常坐不臥支」は, 天台大師が説く「四種三昧」中の「常坐三昧」, および道元禅師が主唱する「只管打坐」と比較して研究されるべきであろう。cf. *Thag* 904.
(なお, 本論考は昭和62年6月29日, 第2回駒沢大学仏教学部定例研究会で発表されたものである)